

The Open Mind of Lafcadio Hearn in New Orleans

BOOK AND ART EXHIBITION

オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン in ニューオーリンズ

初版本と造形美術展

2012年10月18日(木)―28日(日)

テュレーン大学 ジョーンズ・ホール (ニューオーリンズ市)

主催 The Open Mind of Lafcadio Hearn in New Orleans 実行委員会、松江市

共催 テュレーン大学アジアスタディーズ、ルイジアナ・リサーチ・コレクション

協力 ニューオーリンズ日本人会、日本庭園ファンデーション、ニューオーリンズ・ジャパンソサエティ

後援 ニューオーリンズ市、在ナッシュビル日本国総領事館

趣旨

ニューオーリンズは、小泉八雲(パトリック・ラフカディオ・ハーン)がジャーナリストとして1877年から1887年までの10年間を過ごした町で、片道切符の旅を続けた彼にとっては最も長い途中下車をした場所のひとつです。オレンジ色の輝きを放つ「熱帯の入口」「ベランダ、テラス、ポーチ、バルコニーの町」といった新鮮な印象とともに始まったニューオーリンズでの生活の中で、ハーンはクレオールという混濁文化の魅力に次第に引き込まれていきます。諺、音楽、料理、ヴァドゥー教、墓、怪談などを切り口に独特のクレオール文化の探求にのめりこんでいきました。また、ニューオーリンズでは4冊の本を出版し、作家としてのキャリアを本格的にスタートさせます。異文化が共生するこの町で10年間を過ごしたからこそ、文化の混濁性に偏見を持たないハーンの「オープン・マインド」が十分に熟成されたことは疑いの余地がありません。

ラフカディオ・ハーンは、1850年6月27日アイルランド人の父チャールズ・ハーンと、ギリシャ人の母ローザ・カシマチとの間に、ギリシャのレフカダ島で生まれました。八雲は、幼い頃両親と別れ、幼年時代をアイルランドで過ごした後世界各地を旅し、そして1890年に日本に到着しこの国を安住の地としました。そして、彼はその独特の目を通して日本を客観的にとらえ、理解しそして愛しました。異文化や人種などに偏見を持たない、彼の「オープン・マインド

(開かれた心)を持って世界を見つめる態度に、今を生きる私達が共感し学ぶべきことがたくさんあると考えます。

その「ハーンの精神性」をテーマとした美術展“The Open Mind of Lafcadio Hearn”^{*1}は、2009年10月、ギリシャ・アテネのアメリカン・カレッジで初めて開催され、翌年2010年10月には、日本人アーティストを中心に八雲が最も愛した町松江市で、松江城を主会場に開催されました。さらにこの美術展は、2011年秋に海を渡りニューヨークの日本クラブで開催され、ハーンの初版本とともにアート作品を展示し、その美しい本の装丁とアート作品の調和を多くの人が楽しみました。

さて、ニューオーリンズ市と松江市は友好都市であり、18世紀末の美しい町並みと川と湖の町という点でも共通しています。今回の会場となる Tulane 大学は世界屈指ともいえるハーンコレクションを所蔵する大学であり、その意味でもハーンのアート展をニューオーリンズで開催することはとても意義深いことです。

実施内容

ハーンのオープン・マインド、言い換えれば「共生」や「寛容」と言った彼の精神性は多くの著作の中に表現されています。とりわけニューオーリンズ時代の作品 *Gombo Zhebès*『ゴンボ・ゼーブ』、*La Cuisine Creole*『クレオールの料理』や同じクレオール文化圏のアンチル諸島の紀行文である *Two Years in the French West Indies*『仏領西

インドの2年間』では、クレオールという混淆文化が積極的に評価され、文化の接触と融合に関するハーンの寛容でポストコロニアル的な現代に通じる新しい考え方をみることができます。

“The Open Mind of Lafcadio Hearn in New Orleans”は、2010年松江城で展示した作品のうち約24点とギリシャ・アメリカン・カレッジからの2点、小泉八雲記念館からハーンの愛用品3点、またニューオーリンズ時代に刊行された書籍を中心に初版本(Rare Book Collection, Special Collections, Howard-Tilton Memorial Library^{*2}所蔵)約26冊を展示します。ハーンの著書や手紙から伺える彼の哲学や人生そしてオープン・マインドを自由に表現したアート作品は、それぞれの作家の言葉とともに展示します。また、初版本の美しい表紙のデザインとアート作品の調和、そしてハーンがニューオーリンズで取材時に取ったメモノートや愛用のペンとインク瓶も展示し、ハーンのジャーナリスト・作家の魂を感じられるような展示内容になります。

*1. “The Open Mind of Lafcadio Hearn”

“The Open Mind of Lafcadio Hearn”は、アート・コーディネーター、タキス・エフスタシウ(Takis EFSTATHIOU)氏が1996年頃から温めてきたプロジェクトであり、彼の情熱と努力により、2009年に世界で初めてハーンをテーマとする美術展がアテネのギリシャ・アメリカン・カレッジで開催されました。

翌年2010年は、ハーンの来日120年・生誕160年の記念の年に当たり、この美術展は、さらに多くのアーティストの参加を呼びか

会期 2012年10月18日(木)―10月28日(日)

10:00AM―6:00PM (月―土) 12:00PM―6:00PM (日)

場所 テュレーン大学 ジョーンズ・ホール2階 ジョーンズ・ギャラリー (ニューオーリンズ市)

[地図] <http://tulane.edu/about/visiting/uptown-campus-map.cfm> (Building 25)

詳細 <http://tulane.edu/liberal-arts/events.cfm>

入場無料

記念講演会・レセプション

10月18日(木) テュレーン大学 ジョーンズ・ホール

6:00PM―7:00PM 講演会 小泉凡氏(小泉八雲曾孫)

7:00PM―8:00PM オープニングセレモニー

&レセプション

は、松江市の松江城と小泉八雲記念館で開催されました。築400年の歴史的建造物と現代アートのコラボレーションが素晴らしい空間を作り上げました。同時に、ニューヨーク在住のアーティスト野田正明氏による同名のモニュメントが、ギリシャと松江に設置されました。2011年には、海外への巡回展としてニューヨークで開催され、ハーンの美しい装丁の初版本(エフスタシウ蔵)も併せて展示しました。2012年には、Tulane大学の協力によりニューオーリンズでの開催が実現します。

小泉八雲へのThe Open Mind(開かれた精神性)への関心は、ますます高まり、2014年には「へるん文庫」のある富山県で開催されることが決まりました。

*2. Rare Book Collection, Special Collections, Howard-Tilton Memorial Library

会場となるテュレーン大学は、1834年にMedical College of Louisianaとして設立され、1884年正式にテュレーン大学として発足しました。全米でも屈指の歴史を持つ大学で南部のハーバードと称されるほどです。ハーンは、当時テュレーン大学を卒業したばかりの青年医師ルドルフ・マタス(Rudolph MATAS)と知り合い、クレオール文化や医学に関する多くの助言や情報を得ました。ハーンの初の小説『チータ』(1889年)は、マタスの協力で書きあげられたものです。同大学のThe Howard-Tilton Memorial Libraryの特別コレクションとしてThe Lafcadio Hearn Room (ラフカディオ・ハーン記念室)が開設されたのは1941年3月で、そのオープニングでマタス博士自身が記念講演を行っています。また、The Howard-Tilton Memorial Libraryの蔵書は、1940年までに市内のハワード記念図書館からテュレーン大学に寄贈されたものが基盤となっていますが、この図書館の立ち上げを評価する記事をハーン自身が取材してタイムズデモクラット紙に寄稿しているという不思議な縁もあります。

問い合わせ先

1) **Bruce RAEBURN**, Director of Special Collections

TEL: +1504-865-5688

E-MAIL: raeburn@tulane.edu

2) **Lee MILLER**, Head, Louisiana Research Collection

TEL: +1504-314-7833

E-MAIL: lmiller@tulane.edu

3) **松江市国際観光課** (担当: 加田聖)

TEL: 0852-55-5175

E-MAIL: kokusai@city.matsue.le.jp

ラフカディオ・ハーン

1889年、39歳の頃、フィラデルフィアで撮影されたもの。



ラフカディオ・ハーン

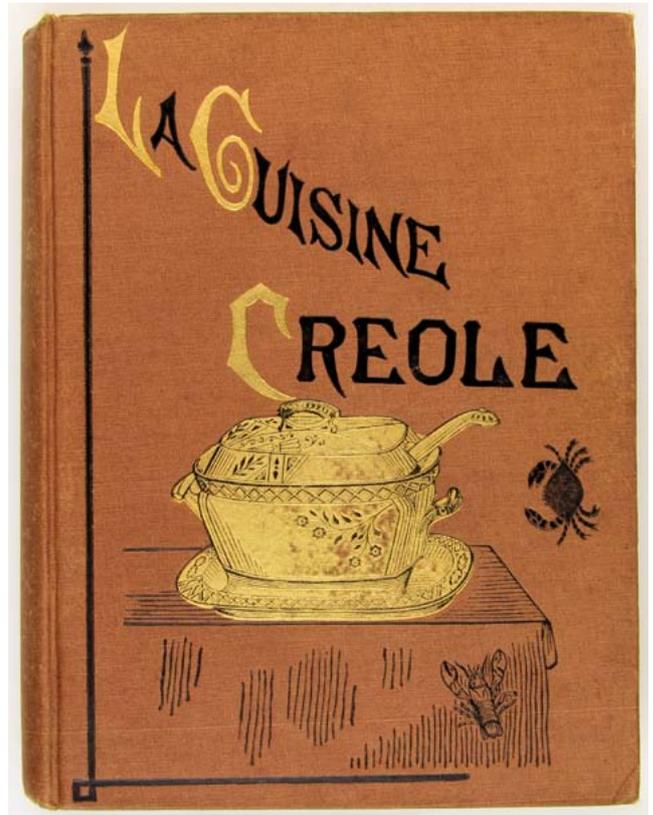
『クレオール料理』

New York: W.H.Coleman

1885年

デュレーン大学 Rare Book Collection, Special Collections, Howard-Tilton Memorial Library 所蔵

『ゴンボ・ゼーブ』とともに、ニューオーリンズ万博開催に向けて出版された3冊のうちの1冊。ニューオーリンズのベテラン主婦たちから聞き書きして多数のレシピを集め、世界初のクレオール料理のレシピ集として刊行された。クレオール文化への強い関心と民俗学者としての努力がうかがえる。



ラフカディオ・ハーン

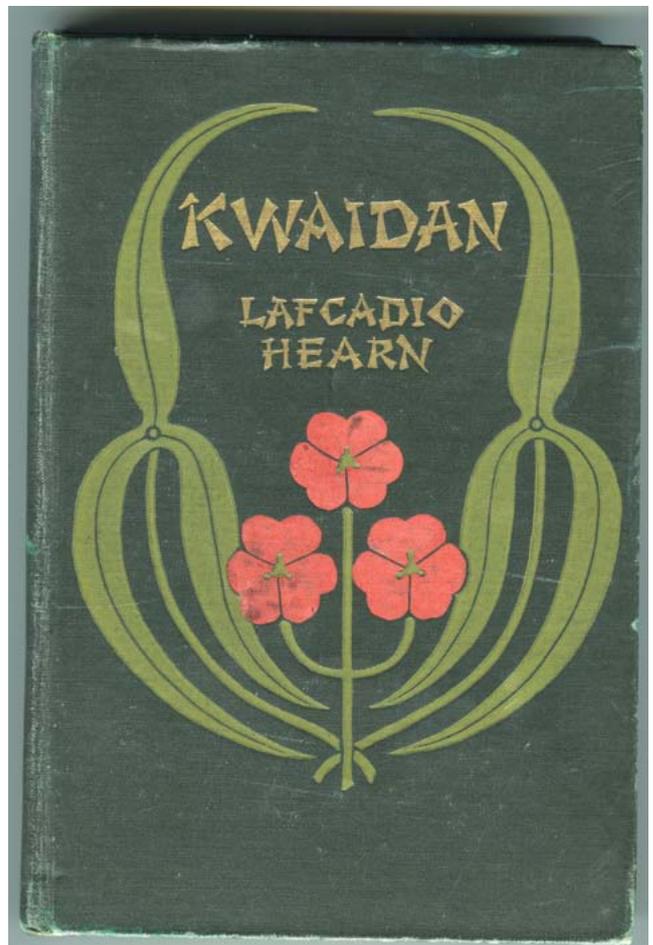
『怪談』

Houghton, Mifflin & Co.

1904年

デュレーン大学 Rare Book Collection, Special Collections, Howard-Tilton Memorial Library 所蔵

ハーンの再話文学(retold tales)のジャンルにおける最高傑作とされる著作。妻セツの語る日本の怪異伝承に文学的魂を吹き込んで英語で翻案した。ハーンは怪談の中には、人間が生きる上での精神基盤となる真理(truth)があるとし、その普遍的な真理を追究するためにこの著作を著した。同書は世界の多くの言語に翻訳されている。



イネス・ジョンストン

アメリカ

オーシャン・イメージ

33.5×30.5cm

色紙、水彩絵の具

2010年

松江市所蔵

ジョンストンの作品は、「ジグソー」のような形が特徴で、原始的なデザインを思い起こさせる。彼女のユニークな表現スタイルは、彼女が旅したアフリカ、ギリシャ、イタリア、メキシコ、インド、日本そしてネパールの国々からの影響をうけ、古代アート形式と現代性が入り混じったものとなっている。これらの旅により、彼女は異国や神秘的な世界に対する興味を持ち続け、そして外国や異世界に対する強い想いがこの作品、ラフカディオ・ハーンに対するオマージュに具現化されている。

メガクリス・ロガコス
元ギリシャ・アメリカン・カレッジ学芸員



野田正明

日本

ラフカディオ・ハーンの開かれた精神

55×27.5×18cm

ステンレススチール

2010年

松江市所蔵

この彫刻は、ギリシャ・アテネのアメリカンカレッジと、松江の宍道湖畔に両国を象徴的につなげる意味合いを込め設置されている2つの彫刻のモデルである。偏見を持たないハーンの開かれた精神は「ラフカディオ・ハーンの開かれた精神」というタイトルに込められ、彫刻のタイトルはそのままこれまでのイベントのタイトルとして定着した。中央で連結し上部で2つのうねりが交差する様は西洋と東洋との交流と絆を、開口部を形作るハートの形は「ハーンの開かれた精神性」を象徴し、広く次世代に伝えていこうとするものである。

